

Mt.T2 氏邸訪問記(2019.4.30)

1. はじめに

[アサヒステレオセンターでのアナログマジックのデモ](#)を受けて、システム一式を借り受け、テストすることになりましたが、まずは手始めにターンテーブルの改造や自作トーンアームなど、アナログに傾倒しておられる Mt.T2 氏邸でテストをすることになりました。

2. Mt.T2 氏邸のシステムの概要

プレーヤーはパイオニアの PL-31E をベースに、自作ピュアストレートアーム、WE-308、SME-3009MK2 の 3 本アームを取りつけています。

ベースはパイオニアの PL-31E ですが、ほとんど改造機でラワン合板積層のキャビネットに上記アームを搭載し、高さ調整スパイクで、足にウェルフロートを装備したラワン合板積層のベースに乗せる 2 階建構造となっています。

トーンアームとフォノイコライザー、カートリッジの詳細

1) 自作ピュアストレートアーム+SONY XL-MC5

フォノイコ CEC PH53 (バランス駆動)

2) SAEC WE-308+SONY XL-MC5

フォノイコ CEC PH53 (バランス駆動)

3) SME 3009 S2+Shure V-15 Type3 HE

フォノイコ Project Phono Box RS

また、アンプは SOULNOTE A-2 BTL、スピーカーはパイオニア S-1EX を使用し、カートリッジをアームに取り付けた後、アナログマジックで測定、調整しています。





3. Mt.T2 氏邸のシステムの測定と試聴経過

最初に、耳慣らしということで、パッヘルベルのカノンとガムランの SACD がかかりましたが、ソウルノートのアンプに抱いていた、ややアグレッシブな印象のソウルノートの試聴会での印象と違い、随分と繊細で穏やかな印象です。Mt.T2 氏によれば、ソウルノートの個性とスピーカーの個性とがうまくバランスをとれて、クラシックにも対応できているとのことでした。

すでに、上記 1) と 2) については測定、調整済とのことでした。なお、PC とフォノライザー間のインターフェイスは純正の USB Phono Plus を使用せず、Roland FA-66 を使用したとのことでした。

測定結果と調整の効果では、次のようなことがあったとのことでした。

- ・アンチスケーティングについては、ストレートアームの 1) と J 字アームの 2) のアーム間であまり変わらない結果がでた。
- ・アジマス調整は非常に微妙である。

- ・カートリッジの VTA（垂直トラッキング角）の調整は難しい上に、あまり測定値に変化が出てこない。
- ・システム全体の振動値やシステム全体の共振値が、取扱説明書の基準値の範囲に入らない。

この共振値については、実際に測定を行うところを見せてもらいましたが、先のアサヒステレオセンターでのデモの結果とまったく異なる結果を得ました。

調整の結果、音質への影響はどうであったか伺ってみました。解像度が上がり見通しが良くなったような印象があるが、1:1比較ではないので、はっきりしたことは言えない、また原因の解明と対策はできていないところがあるので、このあたりが明確になれば、大きな効果を発揮できる可能性は残っているとのことでした。

当方が持参した、ツアラトゥストラの冒頭のオルガンの持続音やティンパニの打音を聴かせてもらいましたが、ストレートアームの 1) では少しぼやけ気味であった低音が、J字アームの 2) では明瞭になり、また、1) では突出気味であった金管群とのバランスも良くなりました。未調整の 3) では、その中間といったところで、アームやカートリッジの違いが顕著に出ており、それだけ全般的な調整がうまくいっていること、アンプの BTL 駆動の制動も効いている印象です。バッハのチェンバロ協奏曲でも、2) では、チェンバロの繊細感や通奏低音の明瞭さも表現できています。

ターンテーブルシートは、真空吸着式を使用されており、極めて安定した再生ぶりであることも分かります。

この後、Mt.T2 氏の調整の結果を確認する種々の音源の再生がありました。

ST 氏が持参された 45 回転盤では、45 回転での調整はしていないにも関わらず、切れ味の良い音が聴けました。

さらに、スーパーツイーターの付与の効果の確認、先日の[村井さんを偲ぶ会](#)でお会いした、井筒香奈江さんのボーカルのアナログ盤試聴、Studer の 38cm2Track デッキの再生、パイオニアの S-A7 を後方に配置してのサラウンド音源の確認、nano iDSD による Audirvana からの MQA サンプル盤のリップリング WAV の送り出し再生など、短時間ではありますが、盛りだくさんの体験ができました。

サラウンド音源の場合、リストのカンパネラでは、音場表現は豊かになるものの、実際の演奏会場におけるホールトーンよりは、やや特有の強調感が感じられました。

Studer の 38cm2Track デッキの再生では、コピーを繰り返したテープでしたが、デッキの能力のポテンシャルの高さを発揮していました。nano iDSD による MQA 音源の再生では、Mt.T2 氏によると不安定なところがあると聞いていましたが、今回は正常に再生されていることが、Audirvana の画面と nano iDSD のランプで確認され、音質的にも MQA の再生音になっていました。

4. 考察

アナログマジック関係について整理しますと、結論を出すには早計ですが、推測も交えて、以下のようなことが言えるのではないかと考えられます。

アナログシステムについて次のような整理ができます。

- ・調整する必要のない項目の分類
- ・調整で追い込める項目の分類
- ・取扱説明書記載の指針では調整しきれない項目の分類

調整する必要のない項目と調整で追い込める項目は問題ないのですが、調整しきれない項目については課題が残ります。この場合、取扱説明書に記載されたような直接的に影響する要因以外の要因や経時劣化にも対象を広げていく必要があります。

例えば、アジマスの調整ではカートリッジの傾き以外に、針の片減りやカンチレバーの曲がり具合、カンチレバーへの針先の取り付け角度なども点検する必要があります。

問題になった共振については、一般論として、ターンテーブルベースの素材や構造、インシュレーター特性、ケーブルの共振、ターンテーブルシートの選択、アームベースの構造や取り付け方法、カートリッジのそのリード線の取り付け具合やシェルの構造、強度とアームへの締め付け具合、ダンパーの劣化なども考慮に入れる必要があります。

今回、インターフェイスには、純正品ではないものを使用していますが、純正品ではどうか、ケーブルやフォノイコライザーまで範囲を広げて、総合的に検討する必要もありそうです。いずれにせよ、考えられる要因を漏れなく挙げ、こまめに検討する必要がありますかと思われ。

初期は調整する必要のない項目でも、ベルトドライブのベルトの伸び、プーリーの汚れなど、リムドライブではリムの摩耗、ターンテーブルの軸の注油、オイルダンプのオイル交換など、定期点検の対象にしておいた方が良いでしょう。

こういった測定と調整の結果を音質的に判定する場合、漫然と音源を選択するのではなく、測定項目に応じた選択が必要と思われます。低域の共振については、オルガンのペダル領域の持続音がその一つですが、アジマスでは、第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが左右に位置するアンサンブル音源、カートリッジのVTA（垂直トラッキング角）やVTF（トラッキング力・針圧）では、音の立ち上がり、立ち下りの鋭い音源などが、仮説として設定されます。

問題点としては、測定から結果の数値の提示までの間のアルゴリズムが公開されていないことで、その妥当性については判断しきれないところがあります。

いずれにせよ、このツールを使いこなすには、かなりの熟練と知識を必要とし、筆者の専門分野の一つであった、物理化学分析機器の扱いを思い出させてくれました。

5. まとめ

今回、短時間ではありますが、MtT2氏がアナログマジックの測定以前に採られてきた対策や調整、およびソウルノートのアンプの導入が成功をおさめていることがよく理解できました。アナログマジックについては、測定、調整、即音質向上といったところまで到達したわけではありませんが、アプローチの取り方や課題を整理、認識することができました。

以上